



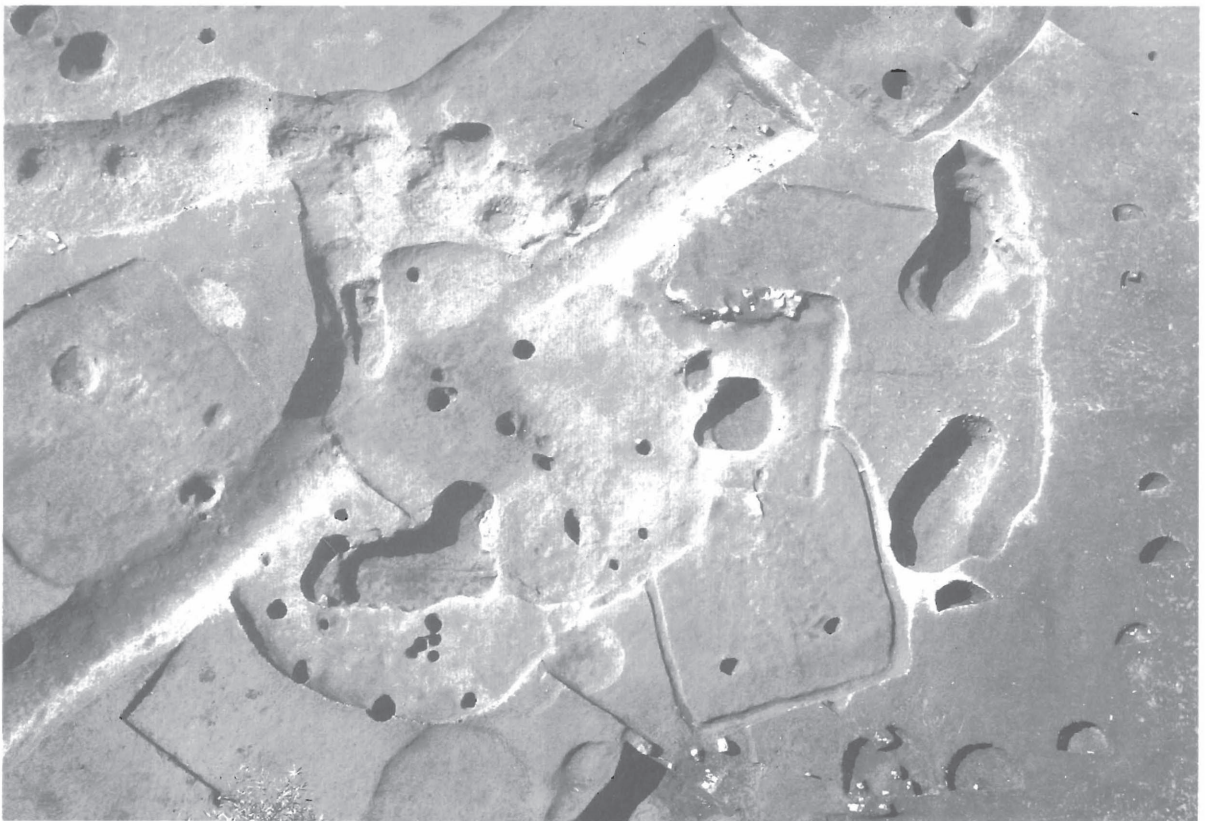
1. 間見穴遺跡上空から印旛沼低地をのぞむ（西から）



2. 縄文早期遺構部分空撮（第3図参照）



3. 9C号住(左)と12号住(右)及び12A・B号炉穴完掘状況(西から)



4. 9C号住と12号住及び12A・B号炉穴完掘状況(上空から)



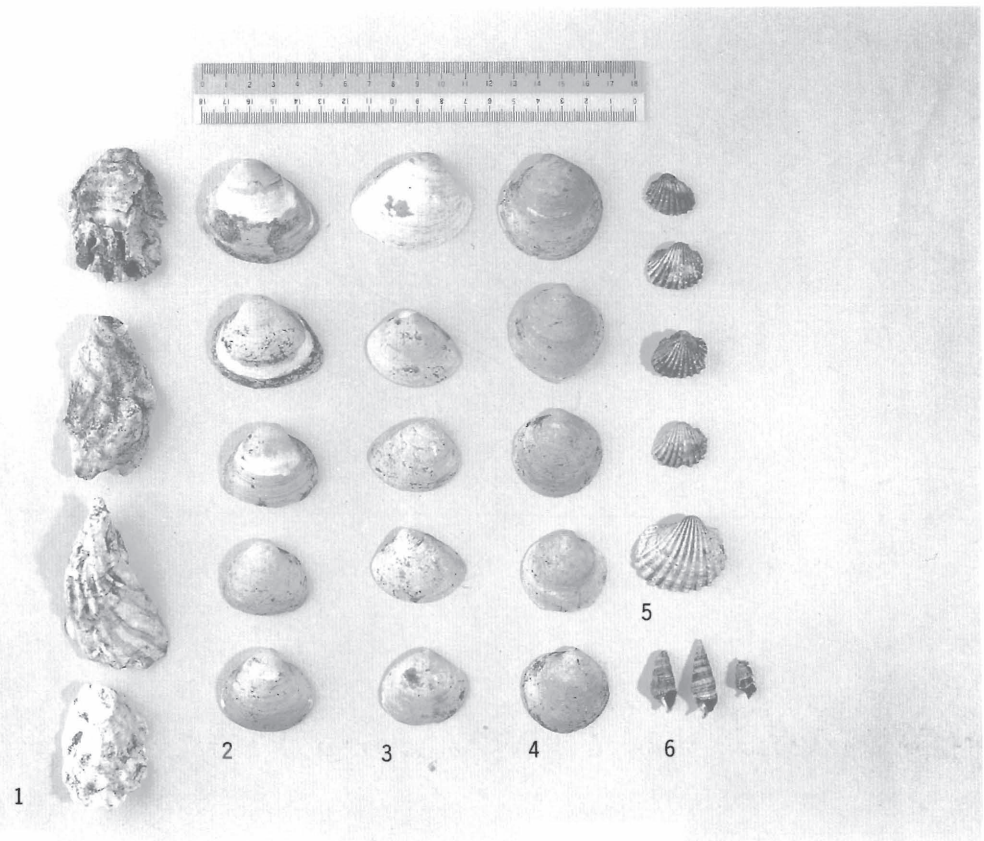
5. 縄文早期包含層と炉穴及び竪穴住居跡（北から）



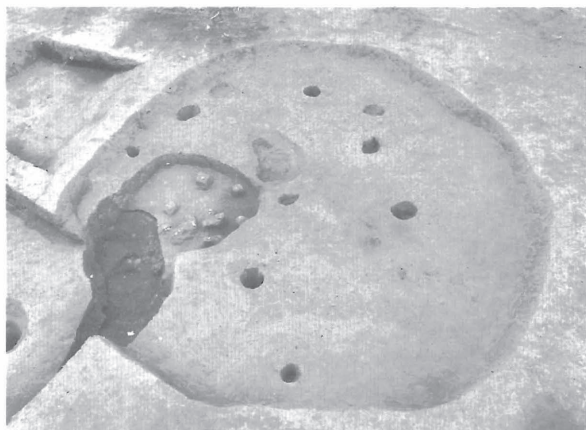
6. 40A・B・C・D号炉穴遺物出土状況（西から）



7. 貝ブロックNo.3 (手前)・No.9 (奥)・No.10 (左)・検出状況 (北西から)



8. 検出貝種 (1. マガキ 2. シオフキ 3. ハマグリ 4. オキシジミ 5. ハイガイ 6. ウミニナ)



9. 14号住完掘状況（南東から）



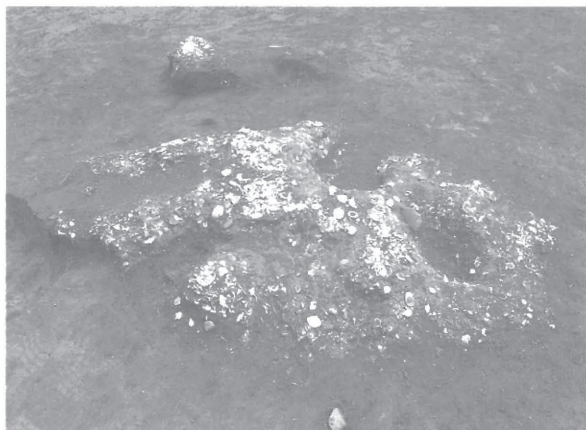
10. 16A号住（右）完掘状況（南東から）



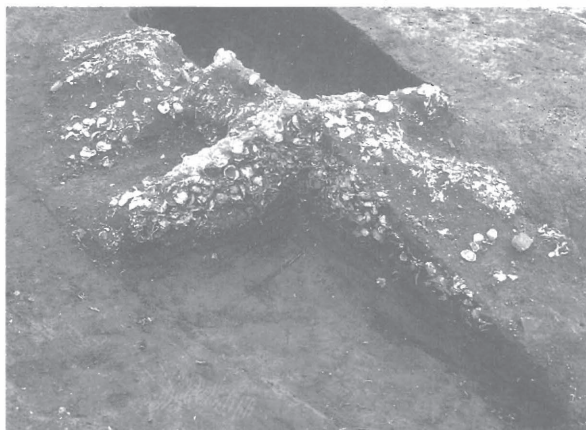
11. 40D号炉穴煙道部断面状況（北から）



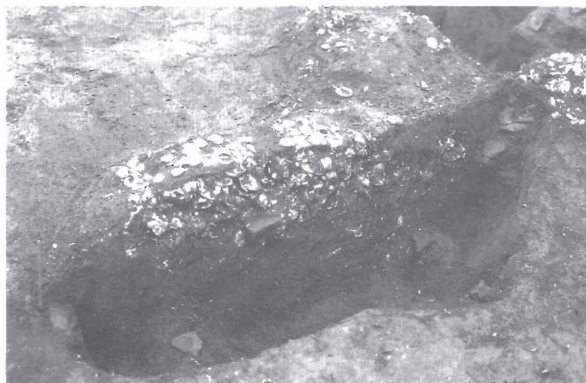
12. 40D号炉穴炉部遺物出土状況（西から）



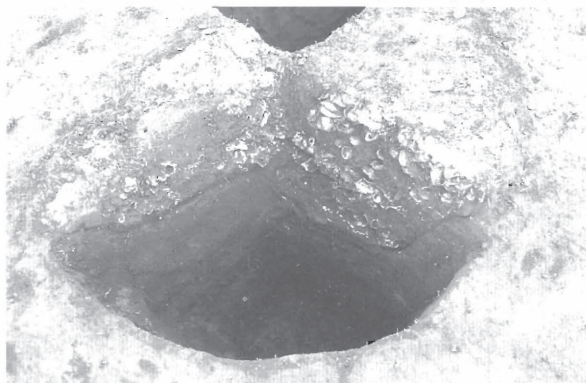
13. 貝ブロックNo.3検出状況（西から）



14. 貝ブロックNo.3貝層堆積状況（北東から）



15. 貝ブロックNo.13貝層堆積状況（北東から）



16. 貝ブロックNo.13貝層堆積状況（南西から）

# 縄文時代早期遺構群の一形態

—八千代市間見穴遺跡の調査から—

岸 本 雅 人・綿 貫 貴

## 1. はじめに

間見穴遺跡は、県道船橋印西線建設に伴う発掘調査で、千葉県文化財センターが委託を受けて調査を行った。本線建設に伴って行われた発掘調査では、平成5年(1993年)度から平成9年(1997年)度にわたり継続的に、島田込ノ内遺跡、間見穴遺跡、道地遺跡の調査が行われた。いずれも縄文早期の遺物は検出されたものの、遺構は検出されなかったが、古墳時代、奈良・平安時代を主体とした貴重な資料が確認された複合遺跡である。<sup>1)</sup>

今回報告する間見穴遺跡は、前回発掘調査された間見穴遺跡の延長部分であり、縄文早期から中世までの各時代の遺構・遺物が確認された複合遺跡である。発掘調査は、平成10年4月から平成11年1月まで行われ、現段階では発掘調査が終了したばかりで、本格的な整理はまだなされていない状況ではあるが、発掘調査中の現場で得られた情報を、縄文時代早期の貝塚・竪穴住居跡・炉穴に限りて早々に紹介するものである。よって、本遺跡検出の縄文早期以外の遺構に関する記述は割愛する。また、詳細については本報告を待たなければならないが、この稿を契機に様々な方々からのご教示を得られることを期待するものである。

## 2. 間見穴遺跡と周辺の遺跡 (第1図)

間見穴遺跡は八千代市島田台字間見穴に所在し、神崎川と新川(旧平戸川)との合流地点から、南西に直線距離で約1.5km隔たった標高20~21mの台地上に位置する。また、本遺跡の所在する台地上及び、神崎川と新川の形成する支谷を隔てた対岸の台地上には多くの遺跡が認められる。ここでは、本遺跡の周辺の遺跡を、縄文時代早期を中心に第1図にまとめた。

同一台地上に所在する子の神台遺跡(11)と道地遺跡(12)では、条痕文系(縄文早期)土器が出土している。

また、本遺跡から新川を挟んだ台地上、直線距離約1.2kmには、上谷遺跡(19)が所在している。この上谷

遺跡は、八千代市教育委員会による発掘調査が行われ、現在、縄文早期の竪穴住居跡数軒と318基の炉穴が検出されている。<sup>2)</sup>

また、神崎川と新川の合流地点を隔てた対岸の台地上には、本遺跡から直線距離約1.5km地点に船尾貝塚(9)・船尾白幡遺跡(7)が所在している。これらの遺跡はともに、縄文早期(茅山期)の遺構・遺物が検出されており、本遺跡との関連において注目されよう。

縄文早期の炉穴の存在については、前述したように上谷遺跡が特筆されるが、他には同じく八千代市にある下高野新山遺跡(25)で29基、瓜ヶ作遺跡(10)で12基、白井町にある一本桜南遺跡(2)で23基以上が検出されている。また、印西市にある松崎VI遺跡でも炉穴が検出されている。<sup>3)</sup>

このように、縄文早期の遺構・遺物が、30か所にもおぼる周辺の遺跡から確認されている。この意味においても、本遺跡での新発見は、この地域の縄文早期を解明していく上での貴重な資料と言えるであろう。

さらには、今後の縄文早期の研究の進展に、本遺跡の資料が少しでも生かされるならば幸いである。

## 3. 遺跡の概要 (第2図)

間見穴遺跡は、神崎川と新川が形成する支谷に向かい舌状に突出した台地の南端部分をしめる周知の遺跡である。今回の調査は道路建設に伴うものであるため、遺跡全体から見ると、台地縁辺部の線的調査と言える。

しかし、前回は行われた調査(平成5,6年度)では、石棺を有する古墳等も検出されており、今回の調査(平成10年度)を加えると、旧石器時代から中・近世にわたる全時代の遺構・遺物が確認された大規模な複合遺跡である。今回の調査対象面積は4,331㎡で、確認調査の結果、上層全面本調査で行われ、遺跡全体では次の遺構が検出された。<sup>4)</sup>

旧石器時代石器集中地点2か所、竪穴住居跡46軒(縄文早期4軒・弥生後期3軒・古墳前期21軒・古墳

後期6軒・奈良平安12軒)、縄文早期(炉穴27基・竪穴遺構3基・地点貝塚20か所・遺物包含層)、古墳前期から奈良・平安時代(掘立柱建物跡6棟・土坑50基・ピット134基・井戸状遺構1基)、その他(溝状遺構9

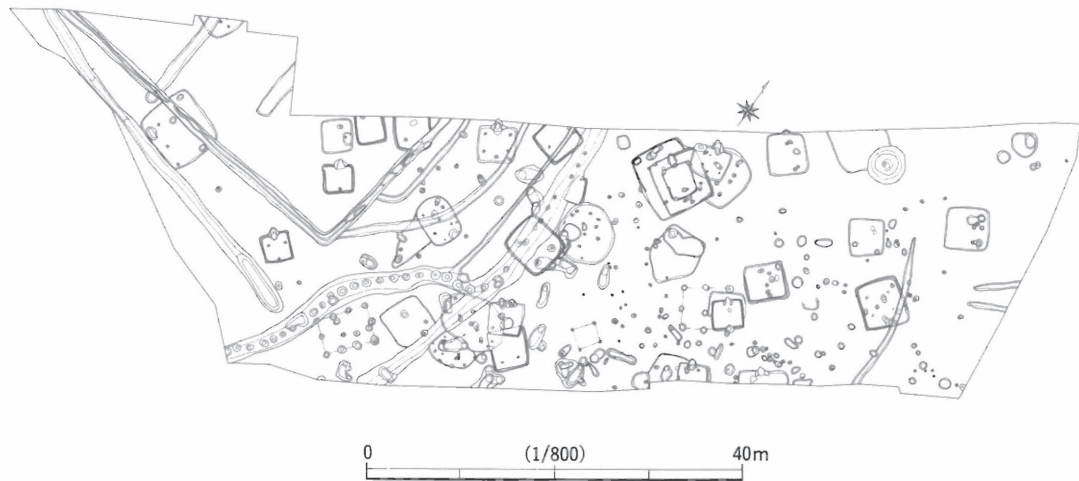
条)等である。

前述の通り、発掘調査が終了したばかりのため正確な数値については本報告を待ちたい。



第1図 間見穴遺跡と周辺の遺跡 (1/2.5万)

1. 間見穴遺跡
2. 一本松南遺跡
3. 榎峠遺跡
4. 高根北遺跡
5. 白井先A地点遺跡
6. 上台遺跡
7. 船尾白幡遺跡
8. 坊山遺跡
9. 船尾貝塚
10. 瓜ヶ作遺跡
11. 子の神台遺跡
12. 道地遺跡
13. 中郷遺跡
14. 松崎VI遺跡
15. 西ノ原第1遺跡
16. 南台遺跡
17. 逆水遺跡
18. 花輪台遺跡
19. 上谷遺跡
20. おおびた遺跡
21. 源五台遺跡
22. 作ヶ谷津遺跡
23. 先崎西原遺跡
24. 先崎西谷津遺跡
25. 下高野新山遺跡
26. 渋内遺跡
27. 管地ノ台遺跡
28. 権現後遺跡
29. ラサル山遺跡
30. 北海道遺跡



第2図 本線部分全測図

#### 4. 縄文早期の遺構 (第2、3図)

##### 1) 基本土層について

間見穴遺跡の基本土層についてここで簡単に触れておく。I層(表土層)は南側で薄く確認されたが、北側の部分では広く攪乱を受け、II層との区別がはっきりしない。II層は南側では3層(II a = 黒褐色・II b = 明褐色・II c = 暗褐色)に明確に区分でき、北側ではII b・II c層が薄く確認できる状況であった。II b層はいわゆる新期テフラ層である。III層(ソフトローム)は北側で薄く、南側でやや厚く確認できた。III層は若干暗い褐色で、一般的に見られるものに比べれば、ドンヨリと濁った感を受ける。

本遺跡では、縄文早期の竪穴住居跡・炉穴・地点貝塚以外にも、茅山下層式の土器を主体に鶺鴒ヶ島台式土器をも多量に包蔵する包含層が確認された。この包含層は、調査区の南側で広範囲に確認され、台地全体で見ると、新川が形成する支谷に向かう緩斜面上にあたる。層位で言うと、II b～II c層に集中し、厚いところでは60cmを越えた。出土した土器量は多量で、しかも完形土器そのものが押し潰された状態で出土する例が多く見られた。

##### 2) 竪穴住居跡について (第2、3図)

本遺跡では縄文早期の竪穴住居が4軒(9C・12・14・16A)検出された。いずれも後世の攪乱を受けているが、遺存状態は良好で、床面からの立ち上がりもしっかりしている。4軒共に包含層の遺物を取り上げた後に、不定形の落ち込みとして確認された。覆土中からは多量の土器が、床面に貼り付くよう出土した。

尚、ここであげる住居番号は、調査時の遺構番号を

そのまま使用した。

##### 9C号住

本跡は、台地が新川に形成される支谷に突き出す緩斜面上の縁辺部に位置する。茅山下層式土器を伴う12号住を切り、鬼高期、奈良・平安時代の住居跡に切られている。覆土中からは12号住同様茅山下層式土器が多量に出土し、床面からは押し潰された状態の復元可能な土器も多数出土した。また、石皿が床面から壁の立ち上がり部分に貼り付くような状態で出土した。

平面形態は楕円形を呈し、長軸方向はほぼ東西に持つ。炉は床面のほぼ中央に認められたが、焼土は少量でしかも薄い状態であった。床面は堅く締まり、壁直下から炉のある中央部分に緩やかに窪んでいる。<sup>5)</sup>

規模は長軸で7.1m、短軸で5.1mを測り、床面積は約26.18㎡である。柱穴と思われるピットは10基認められた。

##### 12号住

9C号住より若干南側に位置し、9C号住・炉穴との切り合い関係にある。本跡の床面に貼床が認められず、9C号住・炉穴の覆土と同一の土層が、床面に認められたため本跡が9C号住より古いことが確認された。このため本跡の正確な規模は不明であるが、遺存する部分から推定すると、平面形態は円形を呈すと思われる。遺存する床面は堅く締まり、平らである。壁もしっかりと立ち上がり、壁柱穴の跡が2か所で確認された。これを含めると、柱穴と思われるピットは15基となるが柱穴が集中する箇所があることに注目したい。また、9C号住に切られている東側の部分で焼土を含む土坑2基が検出されたが、本跡との関連は不明





第3図 縄文早期遺構群抽出図

である。本跡の床面からは、9 C号住同様完形に近い茅山下層式土器が出土した。

#### 14号住

9 C号住から台地内部へ約15mほど入った所に位置する。平面形態は若干の歪みはあるが、径約6mのほぼ円形に近い形態である。本跡は土坑と炉穴、また、一部分を弥生後期の住居に切られている。覆土及び床面から茅山下層式土器が多量に出土した。柱穴と思われるピットは10基確認され、床面は締まり、壁もしっかり立ち上がっていた。炉は床面中央やや北よりの位置にあり、薄い焼土が確認された。床面は9 C号住同様壁直下から中央部分に向けて緩やかに窪んでいる。

#### 16A号住

14号住から北東方向へ約15mほど台地内部に入った所に位置する。本跡は今回の調査で住居跡の切り合い関係が一番激しい状況下で確認された。古墳時代3軒、奈良・平安時代1軒と本跡の住居跡計5軒の切り合いである。したがって半分以上を攪乱されているが、残った部分の遺存状態は良好である。壁・床面共にしっかりしており、本跡に伴う柱穴と思われるピットも6基確認された。なかでも一番南に位置する柱穴の覆土内からは、壁に貼り付く状態で大形の土器片が出土した。このことは柱を固定するために意識的に置かれた可能性もあるが、詳細については本報告を待ちたい。攪乱が大きいため平面形態は正確には解らないが、遺存する部分から復元すると楕円形に近い形態を呈すると思われる。覆土及び床面からは、他の住居跡同様、多くの土器片土器が出土したが、本跡には他の3軒と若干異なる点があり、出土土器中に鶴ヶ島台式土器が含まれる割合が高かった点である。

以上、4軒の住居跡について記述したが、この4軒の配列が、全体形がほぼ環状を呈す地点貝塚の外側に巡ることに注目したい。

#### 3) 炉穴について (第3、4、5、6図)

本遺跡で検出された炉穴は重複しているものも含め、計27基で、早期包含層域の中央部から南西側ですべて検出された。覆土及び底面からは鶴ヶ島台期から茅山下層期の土器が出土した。未整理のため正確な判定はできないが、調査中に確認した段階では、鶴ヶ島台期に属すると思われる炉穴は若干少なく、茅山下層期に属すると思われる炉穴の方がやや多いような傾向が見られた。

本遺跡で検出された炉穴を形態的に分類すると、大まかに3種類に分類できる。

I類……円形プランで掘り込みが浅いもの

II類……楕円形あるいは長楕円形プランで掘り込みが深いもの

III類……煙道施設を持つもの

検出された炉穴のうち、II類の形態（特に長楕円形プラン）を呈するものが多い。本遺跡におけるI類の炉穴は、いわゆる足場を持たない「竪穴炉」である。煙道施設を有するIII類の炉穴については、後で詳しく触れることにする。

また、27基の炉穴のうち、17基に重複が見られる。重複には規則的な切り合いを示すものが認められ、4分類される。

- 旧炉穴の長軸に対し左右90度以内に交叉する形で新炉穴の長軸を設けるもの
- 旧炉穴の炉部の前方をさらに拡張して新炉穴の炉部を設けるもの
- 旧炉穴の足場部分の後方を拡張して新炉穴の足場を設け、旧炉穴の足場部分を新たな炉部とするもの
- 旧炉穴の炉部と足場を含めた底面を固めて、同じ位置に新炉穴を再構築するもの

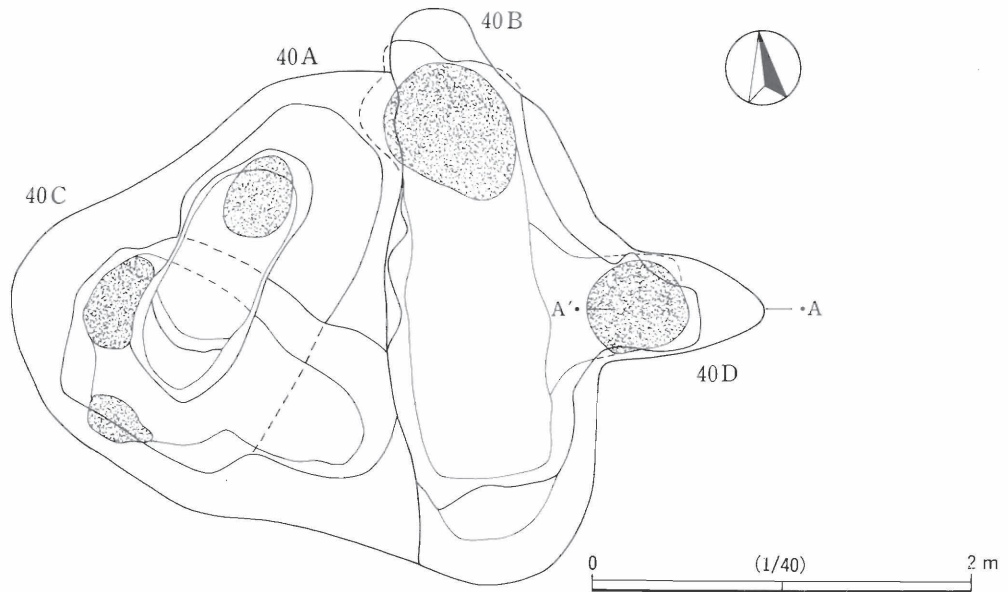
本遺跡においては、2～3基が重複しているパターンが多く、アメーバー状に重複するような炉穴群は検出されなかった。また、足場を中心に180度反転させた位置に新炉穴の炉部を設けるタイプも検出されず、概して炉穴の長軸方向を極端に変えないタイプが多いと言える。

次に、煙道部を持つ40D号炉穴について触れることにする。

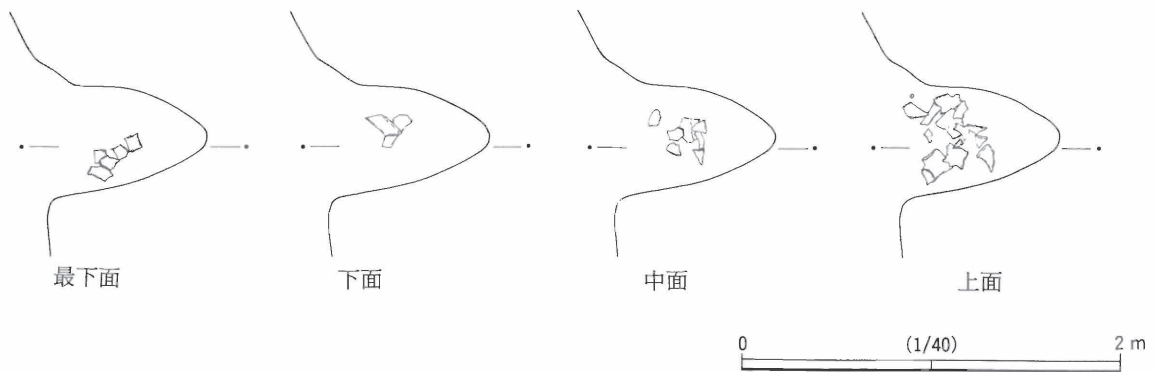
従来、煙道付きの炉穴は「煙出口が塞がらない程度に礫等で孔を制御し、そこに尖底土器をすえて煮炊きを行った調理施設」と考えられていた。<sup>6)</sup>

本跡は、平面形態が長楕円形の40B号炉穴の足場から長軸に対し、ほぼ90度の壁面を中央部から足場まで、幅約60cm・奥行約50cm程、オーバーハングして掘り込み、天井部に煙道を設置していた。また、炉部からは平らに置かれたような状態で、大形の土器片が、層をなして出土した。しかも、その層は4層確認され、焼土粒を多量に含む層と、炭化物を多量に含む層にサンドイッチ状に挟まれる状態であった。

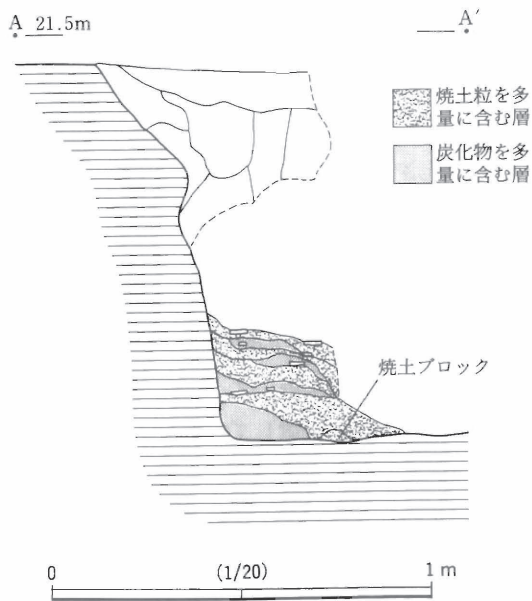
この土器片は、層ごとに平面図におとし、取り上げ



第4図 40 (A~D) 号炉穴平面図



第5図 40D号炉穴遺物出土状況図



第6図 40D炉穴セクション図

た。上面の土器片の量は4層中で一番多く、しかも大形の破片であった。また、出土状態が平らでない状態のものも見られた。上面のこれらの土器片は、焼土粒を多量に含む層の直上で出土したが、二次焼成を受けた痕跡は見られず、若干の煤が全体に付着している状態であった。中面・下面・最下面の土器片の量は上面に比べると少なくなり、若干の重なり合いはあるが、ほぼ平らである。これらの土器片も焼土粒と炭化物を多量に含む層に部分的に挟まれる状態で出土した。中面以下の土器片は直上で火を受けるため、激しい二次焼成を受けてもよいはずであるが、思ったよりも激しくなく、器面にやや多めの煤が付着した状態であった。<sup>7)</sup>他の遺跡でも炉部上面に土器片が出土することが多く認められているが、本跡のように重層構造を持つ炉穴の検出例は稀有な例と言えよう。また、本跡は40B号炉穴と重複関係にあるが、足場の位置が同一で、炉部

は約90度に開く等、きわめて近い時期に使用されていたのではないかと思われる。尚、本跡の炉部からは鶺鴒ヶ島台式土器が出土したため、この時期に比定することができる。

#### 4) 貝塚について (第3、7図)

調査区域内で地点貝塚は大小20か所検出されたが、調査中は地点貝塚にNo.1～No.20のブロック番号を付したため、本稿では、地点貝塚をブロック番号で呼ぶことにする。これらの地点貝塚はいずれも、台地が新川の形成する支谷に向かい緩やかに傾斜する緩斜面上にある。層位ではII b層下面からII c層にかけての、いわゆる、縄文早期の包含層中から検出された。

貝種はハイガイ・マガキ・オキシジミ等を主体に、アサリ・ハマグリ・シオフキ・ウミナ等が見られた。検出された20ブロックの規模は、大規模と言えるものはなく、ほとんどが中規模・小規模のブロックと言える。中規模なブロックでは、主体となる貝種による層の区別はほとんど見られなかった。また、小規模なブロックでは、主体となる3種類の貝が同量程度に混在する傾向は見られず、3種類のうちどれか1種類が主体となり、それぞれのブロックを構成する傾向が見られた。いわゆる純貝層に近い混貝層であった。また、各ブロックの貝層中には茅山下層式土器が多量に含まれているものもあった。

各ブロックの貝は土坑状の窪みに廃棄され、そのほとんどがレンズ状に堆積していた。一方、No.8ブロックは、27号炉穴の覆土上面に、また、No.13・No.14・No.15ブロックは、40(A～D)号炉穴の覆土上面に確認された。いわゆる、大きく深い炉穴が廃棄された後の、まだ、埋没しきっていない窪みを利用して、貝を廃棄したことになる。一方、このNo.13・No.14・No.15ブロック中には、茅山下層式土器が多く含まれていたため、これらのブロックはこの時期に比定できる。

本遺跡は、印旛沼低地から、若干支谷をさかのぼった新川水系の台地上に立地している。この立地は、本遺跡で検出された貝種と大きく関係している。つまり、ハイガイ・マガキ・オキシジミ等は湾奥干潟性の貝種とされており、本遺跡の貝種の主体となるのは理解しやすい。また、アサリ・ハマグリ・シオフキ・ウミナ等は内湾砂底性の貝種とされており、本遺跡の貝種の主体にはなりきれないことも理解しやすい。

以上、調査区域内で検出された地点貝塚について記載したが、実は、調査区域外でも地点貝塚が発見された。ここでは調査区域外の地点貝塚について簡単に触

れることとする。本遺跡の南側緩斜面は調査区域ぎりぎりまで大きく土取りがされており、緩斜面はほぼ垂直に抉られていた。その抉られた壁面にハイガイを主体とする貝層が露呈していたため、残った緩斜面をボーリング調査し、3か所に規模の大きな地点貝塚が存在するのが確認された。第3図でその範囲を示したが、地点貝塚全体がほぼ環状を呈することが解った。それにしても、その中央部分を大規模に土取りされていたことは残念である。

#### 5. まとめにかえて

前節までは、調査中に得られた情報を大ざっぱに紹介してきたが、ここでは、若干の私見と今後の展望について触れてみたい。

本遺跡で検出された縄文早期の遺構については、伴出土器からすると、鶺鴒ヶ島台期から茅山下層期にかけて構築されたとすることができる。さらに詳細な時期決定については本報告を待たねばならないが、これまでに解っていることを中心にまとめると次のようになる。

堅穴住居跡4軒のうち、出土した土器によると、16A号住は鶺鴒ヶ島台期の可能性があり、残りの3軒の9C号住・12号住・14号住はともに茅山下層期とすることができる。

炉穴については、少なくとも茅山下層期の堅穴住居跡を切っている14A号炉穴・14B号炉穴と、12A号炉穴・12B号炉穴は茅山下層期以降となるが、覆土中から茅山下層式土器を多く出土していることから見て、堅穴住居の時期にきわめて近い時期とすることができる。

しかし、前述した40D号炉穴の炉部からは鶺鴒ヶ島台式土器の出土も見られており、鶺鴒ヶ島台期に比定することができる。このように、堅穴住居跡と重複しない炉穴の中には、鶺鴒ヶ島台期のものもかなりあるものと思われる。

地点貝塚は、茅山下層式土器を貝層内に含んでいることで、茅山下層期に比定できる。このことで、鶺鴒ヶ島台期と思われる炉穴の覆土から貝層が検出されることも理解できる。

包含層は層位的にはII b層からII c層にあたり、茅山下層式土器を主体とするため、本遺跡の縄文早期の遺構の中では一番新しい茅山下層期と言える。

以上のように、調査中の所見をもとに各遺構の時期を見てきたが、本遺跡の縄文早期の遺構である堅穴住居跡と炉穴及び貝塚が、同一時期又は同時並行で営ま

れていた可能性があるということである。このことは、居住施設である住居と調理施設とされる炉穴、及び食料確保の実態が分かる貝塚との関連から、縄文早期の人々の生活形態を伺い知ることのできる貴重な資料であることは間違いない。

最後に本遺跡が立地する印旛沼低地に所在する、すでに確認されている同時期の貝塚について触れることにする。第7図で示したとおり、本遺跡を含めると印旛沼低地では8か所になる<sup>8)</sup>。全体的に見ると、印旛沼の当時かなり深かった谷から、樹枝状に台地に入り込む支谷を若干さかのぼった地点に貝塚が形成されていることが解る。貝種は、本遺跡と同種類のものが各貝塚で認められているが、印旛沼に近い三ヶ月山貝塚(7)では、内湾砂底性の貝であるハマグリ・アサリ・シオフキ・ウミナ類が主体であり、支谷を奥へさかのぼるにしたがい、湾奥干潟性の貝であるハイガイ・マガキ・オキシジミ類が主体となる傾向が見られる。飯重新畑遺跡(6)・間野台貝塚(5)・上座貝塚(3)等では後者の貝が主体として認められている。このようなことからしても、印旛沼低地の最奥部に位置する本遺跡で、湾奥干潟性の貝が主体となっているのはごく自然のことである。

以上のように、間見穴遺跡の縄文早期の遺構を見てきたが、いずれにしても正確な数値及び詳細については本報告を待ちたい。また、本稿を終えるにあたり、様々な助言や資料を与えて下さった多くの方々に、末筆ではありますが感謝の意を表したい。



第7図 印旛沼低地の縄文早期貝塚分布図

1. 間見穴遺跡 2. 船尾貝塚 3. 上座貝塚 4. 古谷遺跡  
5. 間野台貝塚 6. 飯重新畑遺跡 7. 三ヶ月山貝塚 8. 駒込遺跡  
(1260)

## 註

- 1) 島田込ノ内遺跡・間見穴遺跡・道地遺跡についての記述については、『千葉県文化財センター年報』No.19～No.22を参考にした。
- 2) 上谷遺跡の記述については、上谷遺跡現地説明会及び、その資料を参考にした。
- 3) 間見穴遺跡と周辺の遺跡についての記述と挿図は、『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)』-東葛飾・印旛地区(改訂版)-平成9年5月(財)千葉県文化財センター、及び、『県文化課抄報』・『千葉県文化財センター年報』をそれぞれ参考にした。
- 4) 本稿では、縄文早期の遺構に限定したため、本線部分の全測図しか掲載しなかった。今回の発掘調査では別に2地点の調査区があり、そこでは弥生後期から古墳時代、奈良・平安時代の竪穴住居跡が12軒検出されている。
- 5) 本遺跡9C号住のように、石皿が住居の壁に貼り付くような状態で出土した例は、船橋市飛ノ台貝塚で検出された住居跡の中にも、同様の状況が報告されている。また、住居跡の形態についても、床面中央部分が壁直下から緩やかに窪んでいること、薄い焼土を含む炉を持つこと、また、住居の平面形態が楕円形を呈するものがある等、飛ノ台貝塚検出の住居跡に近似するところが多い。
- 6) 炉穴研究においては諸説あり問題点も多い。また、炉穴の機能については、若干の異論はあるが、調理施設として考えられてきた。  
麻生 優 1957「佐倉市上座貝塚発見の住居跡址と炉穴」『駿台史学』6号  
戸沢充則・堀越正行 1974「炉穴について」『美濃輪台遺跡A地点(貝塚)』  
今井恵昭・加藤 修1976「遺構」『田中谷戸遺跡』一方、「調理の他には、保温や照明などの機能も考えられ、実際は多目的に使用されたと思われる。」とも考えられている。  
森 幸彦 1982「炉穴の形態と機能に関する考察」『多聞寺前遺跡』I
- 7) 船橋市飛ノ台貝塚では炉部上面に二次焼成を受けていない大形の土器片が検出され、この出土状態に対して「飛ノ台パターン」と仮称している。  
本遺跡検出の40D号炉穴からの土器の出土パターンは、飛ノ台貝塚の炉穴に近似している。
- 8) 印旛沼低地の縄文早期貝塚分布図作成にあたっては、当センター資料部資料課西野雅人氏の協力を得

た。

また、4節 3) 炉穴については、國學院大學学生の清水俊次氏の協力を得た。両氏にはこの場をかりてあつくお礼申し上げたい。

#### 参考文献

- 杉原荘介 1932「下総飛ノ台貝塚調査概報」『史前学雑誌』4-3
- 和島誠一 1939「印旛沼沿岸に於ける縄文式4遺跡の発掘」『人類学雑誌』54-11
- 飛ノ台貝塚調査分科会 1939「下総飛ノ台貝塚調査報告」『考古学』10-4
- 武田宗久 1953「原始社会」『千葉市誌』
- 麻生 優 1959「佐倉市上座貝塚発見の住居址と炉穴」『駿台史学』9
- 塚田 光 1966「縄文時代の炉穴」『下総考古学』2
- 塚田 光 1966「縄文時代の共同体」『歴史教育』14-3
- 安孫子昭二他 1968『多摩ニュータウン遺跡調査報告』V
- 野川遺跡調査会 1971「野川遺跡の調査」『文化財の保護』3
- 横川好富・佐藤茂樹・昼間孝次 1971「諏訪山遺跡」『埼玉遺跡調査報告』8
- 種田齊吾 1972「茅山式期における炉穴の予察」『なわ』9
- 宍倉昭一郎 1974「石器時代」『千葉市史』
- 桑原 護・横山 巧 1974『飯重』
- 戸沢光則・堀越正行 1974「美濃輪台遺跡A地点」『市川市博物館研究調査報告』1
- 西田道世・鷹野光行・米田耕之助 1974「東間部多遺跡」『東間部多古墳群』
- 千葉県地域振興公社 1975『公津原』
- 船橋市教育委員会 1975『佐倉道南』
- 堀越正行・田川良 1975「美濃輪台遺跡B地点」『市川市博物館研究調査報告』2
- 熊野正也・伊礼正雄 1975『臼井南』
- 熊野正也・堀越正行・佐々木和博 1976『臼井南』石神III地点
- 我孫子市教育委員会 1976『柴崎遺跡調査報告書 -第三次・第四次-』
- 田中谷戸遺跡調査会 1976『田中谷戸遺跡』
- 桑原 護・柿沼修平 1977『間野台・古屋敷』
- 佐倉道南遺跡調査団 1977『佐倉道南』C地点
- 飛ノ台貝塚発掘調査団 1978『飛ノ台貝塚発掘調査概

報』

- 山本輝久 1979「炉穴について」『上浜田遺跡』
- 印旛村教育委員会 1980『吉田馬々台遺跡-縄文早期炉穴址群の調査-』
- 鈴木秀雄 1980『ト伝』
- 堀越正行 1980「杉ノ木台遺跡-第3次・第4次-」『昭和54年度 埋蔵文化財発掘調査報告』
- 千葉市教育委員会 1981『千葉市文化財調査報告書第4集大道遺跡』
- 森幸彦 1982「炉穴の形態と機能に関する考察」『多聞寺前遺跡』I
- 千葉県文化財センター 1982『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書VII 復山谷遺跡』
- 市原市文化財センター 1984『片又木遺跡』
- 佐藤明生 1984「炉穴研究ノート」『貝塚』33
- 十菱駿武・鈴木克彦 1984「炉穴の研究」『考古風土記』9
- 千葉県文化財センター 1984『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査発掘調査報告書-No.7 遺跡-』
- 安孫子昭二 1985「炉穴はこのように使われた」『東京の遺跡』No.6
- 山武考古学研究所 1985『エゴダ遺跡』
- 印旛郡市文化財センター 1986『印旛村村道瀬戸師戸線発掘調査報告書 古山遺跡』
- 阿部芳郎 1989「縄文早期末葉における生産構造と居住活動について」『半蔵窪遺跡調査報告書』
- 小葉一夫 1991「炉穴と領域-そのための分布図作成から-」『法政考古学』20
- 小林謙一 1991「縄文早期後葉の南関東における居住活動」『縄文時代』2
- 斎藤 進 1991「研究ノート 炉穴の時代」『研究論集』X 東京都埋蔵文化財センター
- 市原市文化財センター 1992『奉免上原台遺跡』
- 千葉県文化財センター 1993『千葉市地蔵山遺跡(2)』
- 千葉県文化財センター 1993『印旛郡本埜村五斗蒔遺跡・印西町宗甫遺跡』
- 千葉県文化財センター 1994『沼南町石揚遺跡第2分冊』
- 山武郡市文化財センター 1994『大網山田台遺跡群 I -縄文時代篇-』
- 山武郡市文化財センター 1994『砂田中台遺跡(旧石器縄文時代篇)』
- 山武考古学研究所 1996『佐倉道南遺跡』